

基本的な生活・学習習慣を身に付け 確かな学力を高めるための地域総がかりの取組

仙台市教育委員会

はじめに

文部科学省の委託事業である学力調査活用アクションプラン推進事業は、推進地域にある小中学校が共に抱える課題に対し、市教委、地域、さらには、宮城教育大学の知見を総動員してその改善を図るものである。

平成 19 年度から始まった全国学力・学習状況調査と本市が独自に実施した標準学力検査結果の分析から、全市的な課題及び学校ごとの課題が明らかになった。これを受け、本市では、平成 21 年 3 月に、基礎的知識の徹底、応用力の育成、学習意欲の向上を目標とする「確かな学力育成プラン」を策定し、本プランの円滑な実施に向けて 4 月には新たに「確かな学力育成室」を設置した。

本事業は、地域総がかりで実施する「確かな学力育成プラン」を具現化する学力向上のリーディングケースの一つとして、市教委の強力な支援のもとに推進してきた。

I. 都道府県・指定都市教育委員会 における取組

1. 授業内容について

(1) 事業概要

本事業の実施に当たっては、平成 19 年度、20 年度の全国学力・学習状況調査と仙台市標準学力検査の結果を考慮し、下記の 2 地域を指定した。

仙台市立岩切中学校区（中 1 校、小 1 校）

仙台市立袋原中学校区（中 1 校、小 2 校）

推進地域の小中学校では、共通して以下 3 点の現状と課題が明らかになっている。

- ① 学習の基盤となる基本的な生活習慣や学習習慣の定着に課題がある。
- ② 児童生徒の学力と学習意欲の状況に課題がある。
- ③ 児童生徒の状況から、小中の連携した取組が必要である。

さらに、両地域においては、様々な家庭環境や地域の課題等を抱えており、教職員が日々、児童

生徒の生活習慣の改善、学習習慣の定着に取り組んでいる現状がある。

これらのことから、児童生徒の学力向上に向けた体制づくりに、市教委の全面的支援、小中の連携、地域ぐるみで一体化した取組が必要であると考えた。

また、両地域が共通の課題解決に向けて情報交換を行い、効果的な取組を共有しながら、よりよい改善を図ることも必要である。

市教委では、「確かな学力育成プラン」を効果的に活用しながら推進校の取組を全面的に支援し、実践研究に取り組んできた。

＜アクションプランとしての取組＞

- ① 基礎的知識の習得の徹底を図るため、きめ細かな指導を行う学習支援員を小学校へ配置する。
- ② 小中学校連携を推進（生徒指導・教科指導・自分づくり教育・学習習慣等）するための教科支援員を中学校へ配置する。
本市では、平成 20 年度まで「調査活用協力校」として小中連携推進の取組の中で、中学校に教科支援員を配置してきた。授業時数に余力ができ、小学校との授業交流が盛んに行われた実績がある。
- ③ 学習の習慣化を図る放課後学習支援のための学生ボランティアを活用する。
- ④ 児童の学習の習慣化を図るための地域ボランティアを活用する。
- ⑤ 学習集団としての向上を図るために各種の調査を実施する。
東北大学大学院教育学研究科との連携で、コミュニケーションスキルに関する調査や、生活習慣、学習意欲等の調査を行い、学習集団としての実態や特徴を把握して、学力向上の基礎となる集団づくりの資料として活用する。また、成果指標としても活用する。
- ⑥ 地域アクションプラン連絡協議会を定期的
に開催することで、学校、地域、保護者が一
体となって事業を推進する。

＜市教委の施策としてアクションプランを支える

取組>

- ① 小学校1年生のための生活・学習サポーターによる支援を行う。
- ② 小学校高学年で基礎教科担任制を実施するための人員配置を行う。
- ③ 中1数学で少人数指導を実施するための人員配置を行う。
- ④ 退職校長・教員等を活用した教科指導エキスパートを活用し若手教員を中心に指導方法改善のための支援を行う。
- ⑤ 学力サポートコーディネーターが、学力を中心課題とする学校へ定期的に訪問し、直接授業にかかわって学力向上の一助を担う。
- ⑥ 市教育センターによる実践的授業力向上への支援を行う。

- ⑦ ICT活用による指導手法の充実を図るためのICT機器の活用環境を整備する。
- ⑧ 地域とともに歩む学校を目指した学校支援地域本部事業等の活動を推進する。
- ⑨ 宮城教育大学との連携による「確かな学力育成研修委員会」を組織し、授業の改善を行う。

(2) 実施体制

アクションプラン推進協議会の構成員やアクションプラン推進校の活動等を含んだ実施体制を下図に示す(図1)。

【図1 実施体制】



保護者・地域の皆様へ

『岩切中学校区学力調査活用アクションプラン推進事業』（文部科学省委託事業）

生かそう地域の底力・はぐくもう未来の子ども



～ 現在，着々と進行中！！ ～



冬木立の姿も肌寒く感じられる今日このごろ，保護者・地域の皆様方におかれましては常日ごろより小学校・中学校の教育に対し，並々ならぬご理解とご協力をいただいておりますこと深く感謝申し上げます。

さて，6月より小学校・中学校ともに文部科学省の委託事業であります「岩切中学校区学力調査活用アクションプラン推進事業」に取り組んでまいりました。

小学校と中学校の連携はもちろんのこと，保護者や地域の皆様方とも手を携えながら，児童・生徒の生活習慣・学習習慣の定着や学習意欲の向上に努め，学力の向上を目指しております。

本プランのねらいと事業についてご理解をいただき，ご家庭ならびに地域でのお子様への励ましの声かけ，学校での取り組みにいっそうのお力添えをいただきますようお願い申し上げます。

「岩切中学校区学力調査活用アクションプラン推進事業」とは

- 文部科学省が実施している全国学力・学習状況調査の結果を活用します。
- 学校と地域や保護者が連携して取り組みます。
- 児童・生徒の『生活習慣や学習習慣の定着』『学習意欲の向上』『学力の向上』を目指します。
- 岩切小学校と岩切中学校が連携をいっそう深めながら進めている事業で，「岩切地域アクションプラン連絡協議会」（保護者の代表・地域の代表・仙台市教育委員会の方々で構成）を定期的で開催し，助言をいただきながら取り組んでいます。

全国学力・学習状況調査の結果から次のようなよさや課題がはっきりしてきました。

○ 小学校・中学校ともに

意識調査の結果，「家の手伝いをしている」と回答している割合が大きく，家庭でも自分の役割をしっかりと果たしている児童や生徒が多い。これは岩切地区の大きなよさの一つと考えられます。

○ 岩切小学校のおもな課題

- 国語，算数ともほぼ全国平均に達しているものの，「個人差」が大きく，その対応にいっそうの工夫を必要とする。

○ 岩切中学校のおもな課題

- 国語，数学ともに，全国平均を下回っている。基礎・基本的な知識の定着は十分とは言えず，基本的な生活習慣や学習習慣の定着に課題がある。

これらの課題を解決するために 次のような取り組みを行っています。

II. アクションプラン推進校における取組事例

取組事例①

「生かそう地域の底力・はぐくもう未来の子ども」～地域を愛し、地域に貢献する児童・生徒の育成を目指して～

仙台市立岩切中学校
仙台市立岩切小学校

仙台市立岩切中学校

(1) 学校の状況について

岩切中学校では、全国学力・学習状況調査から、以下の3点が明らかになった。

- ① 国語A、国語B、数学A、数学Bともに、市平均、県平均、全国平均正答率を下回っている。
- ② 基礎的・基本的知識の定着が、まだまだ不十分である。
- ③ 活用する力を問う、国語B、数学Bでは、無解答率が高い。

また、本校が独自に行った「生活や学習に関するアンケート調査」から、以下の4点が明らかになった。

- ① 学習に関する質問項目は、ほとんどの項目で、市平均の数値を下回っている。
- ② 「学校以外での学習時間」の状況を見ると、家庭での学習時間が少ない。
- ③ 家庭では、テレビやゲームに費やす時間が長い。

- ④ 1年生では、「数学の勉強は好きだ」「数学の勉強は大切だ」「数学の授業内容はよく分かる」項目は、市平均を上回っている。

本校生徒の実態から以下の4点が挙げられる。

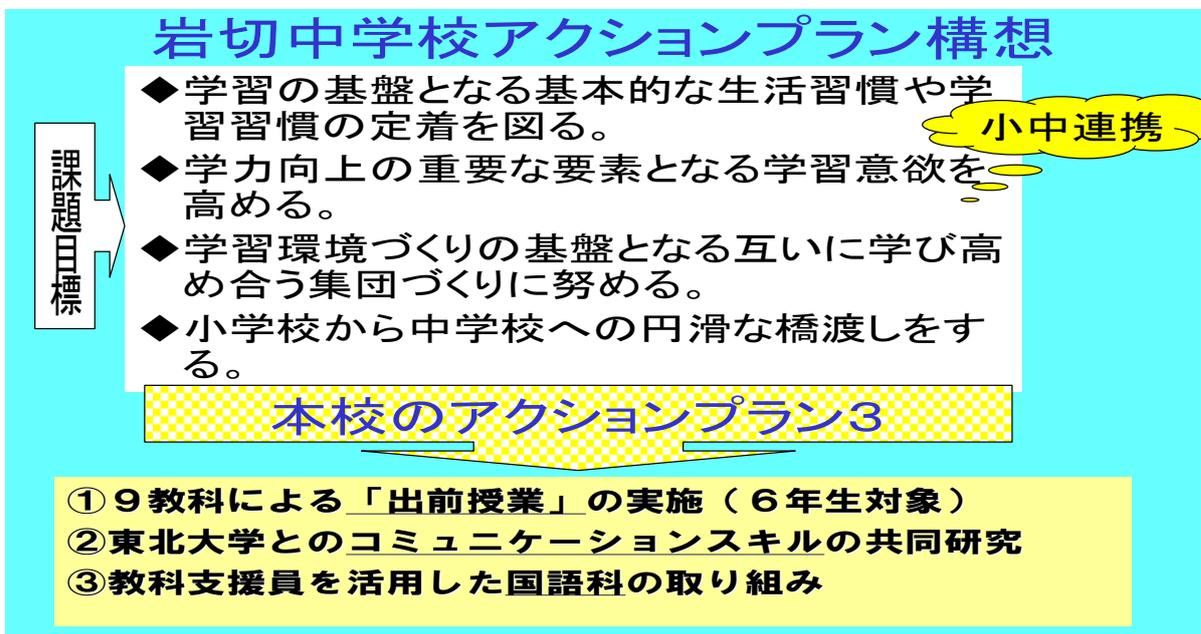
- ① 1小1中学校区であり、人間関係が固定化しつつある。
- ② 素直で明るい、よい意味での競争意識が低い。
- ③ 学習習慣の定着に限らず、授業のルールやマナーなどを繰り返し指導しなければならない現状である。
- ④ 友人とのトラブルや生徒指導上の課題が、学習を阻害する要因ともなっている。
固定化された集団関係の中で、向上心やコミュニケーション能力が高まらず、生活指導や生徒指導上の課題が、学習の妨げとなっているのではないかと考えられる。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

岩切地区での中心となる事業の概要を下図のように捉える。前述の本校の実態と現状を踏まえ、「小中連携」をキーワードに据え、中長期的な展望に立って、次の課題目標を設定し三つのアクションプランに取り組むことにした。

また、保護者や地域との連携も視野に入れながら、本事業を進めることにした(図2)。

【図2 岩切中学校アクションプラン構想】



(3) 成果について

成果をまとめると次の5点に集約される。

① 全国学力・学習状況調査の結果を通して、本校の実態や現状の的確な把握により対応策について具現化を図ることができた。

また、それを受けて、課題目標の設定と課題解決に向けた具体的な方策を明らかにし、本校独自のアクションプラン構想を打ち立てることができた。

② 出前授業を核とした小中連携の取組を通して、中学校区の地域が一体化して学力向上を図る体制づくりの意義や成果について職員間で認識し、課題を共有することができた。

事後のアンケート調査結果からは、児童の反応もよく、小学校の教員から予想以上の好評を得た。成果は、6年生が中学校に入学してから現われるものと期待したい。

③ 本校の三つのアクションプランは、小中の連携、学年の連携及び取組へと浸透し、多様で組織的な実践行動へと発展しながら、指導や学習状況の改善等で一定の成果を得た。

④ 国語科の取組では、評価指標の「授業の内容がよく分かる」「読書は好きだ」の割合が増えており、重点的に取り組んだ成果があらわれた。

⑤ コミュニケーションスキルの共同研究においては、共同研究計画に沿って研究推進を図り、心理教育プログラムの開発と実践ができたことには、大きな意義があった。

(4) 来年度以降の課題について

本事業では、全国学力・学習状況調査と仙台市標準学力検査の結果をいかに活用するかが重要なポイントであった。これは、本校のアクションプランの出発点ともなっている。

二つの学力調査の活用の方法と手立てから、次のような課題が見えてきた。

① 校内研修の場を設定し、調査結果を全職員で分析し、自校の実態と現状課題を職員間で共有する。

② 明らかになった現実課題から、具体的な方策を打ち出し、学校全体から各教科の取組、学年・学級の取組へと具現化していく。

③ 調査結果や課題解決の具体的な取組などの情報交換を密にする。

④ 学校の取組を保護者や地域へ発信し、理解や協力を得ながら、保護者や地域と連携を図る。

⑤ 評価指標のアンケート結果からは、「1日の学習時間」は伸びておらず、学習習慣の定着を図るには至っていない。特に数学科の意欲の低下が顕著であり、いかに歯止めをかけるかが新たな課題となった。

⑥ 小中合同で、小中学校の学校行事と地域の行事を盛り込んだ岩切オリジナルの行事カレンダーを作成する方向で動いている。保護者や地域の方々が、行事カレンダーで岩切中学校区の活動を確認し、関心を高めてもらいたいと願う。

仙台市立岩切小学校

(1) 学校の状況について

本校の児童の実態として、基本的な学習内容や学習習慣がなかなか定着せず、学年が上がるにつれ個人差が大きくなるなどの傾向が見受けられた。どの担任も放課後に個別指導をしたり、家庭学習をこまめにチェックしたりしてきたが、学校の体制として全学年を通し、共通して取り組むまでには至らずにいた。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

① 土台（ベース）づくり

授業の改善や授業づくりに向けて土台になり、学習意欲向上への下支えとなる部分が「アクション1・家庭学習の習慣化」と「アクション2・望ましい学習態度・学習習慣」の形成である。家庭学習の習慣化を図るために本校では学年ごとに「家庭学習の手引き」を作成し家庭に配布した。「家庭学習の手引き」は児童の実態を踏まえ、これまで学年や学級によって取組がまちまちであったものを学年の発達段階や系統性を考慮しながら作成した。

学級担任はさまざまな機会を通して、児童が「家庭学習の手引き」を活用しながら毎日の家庭学習に取り組むように保護者に働きかけた。また、保護者に対しても「早寝・早起き・朝ごはん」をはじめ生活のリズムを整え、しっかりと身につけさせることが、学習態度を定着させる土台になることを働きかけた。

② 学習意欲の向上とできた喜び

本校では算数の基本的な学習内容の定着を図るために2度に渡って算数教室を実施してきた。算数教室は、「アクション3・個に応じた指導」の一環として位置づけ、努力を要する児童に対し丁寧な指導し、「できた」「分かった」喜びを与えられるように工夫してきた。また、保護者

に対しても根気強く励ましの言葉をかけるように働きかけた。

今回、本プランの事業の一つとして3名の学習支援員と2名の学生ボランティアが配属された。学習支援員は主に下位群の児童に寄り添い、意欲的に学習に取り組めるよう支援の手を差し伸べる役目を担った。学生ボランティアは、学習に意欲をもてない児童に対し粘り強く支援を行った。

③ 指導の重点を明らかにした学習

授業の改善を行う上で児童の実態調査は欠かせない。どこでつまづいているのか、全国学力・学習状況調査や仙台市標準学力検査の結果を的確に分析し、きめ細かな対策づくりを試みた。結果を的確に分析するために経年比較（全国学力・学習状況調査については、3か年の同学年比較や2か年に渡る同集団比較）を行った。

結果として、本校の児童は個人差が大きいことや中学に進学しても家の手伝いをまじめにしている児童・生徒が多いことが明らかになった。「保護者・地域に向けて発信したリーフレット」にもその旨を載せ、いっそうの理解と協力を求めた。

また、仙台市標準学力検査の結果は、学年ごと・教科ごとにまとめた対策を「授業改善資料」としてファイルにとじ込み、学年に1冊ずつ配布し普段の授業で活用している。

④ 地域の人材活用と地域連携

本校では、総合的な学習の時間を中心に地域の特色を生かした「曲がりねぎ」の栽培や「稲作」に取り組んできた。講師はもちろん地域の農家の方である。低学年では、生活科の学校探検をはじめ保護者にも世話になる機会が多い。これまでの地域の方々や保護者の協力を得て行ってきた活動を整理し、いっそうの理解と協力を求め、地域とのよりよい連携を目指した。

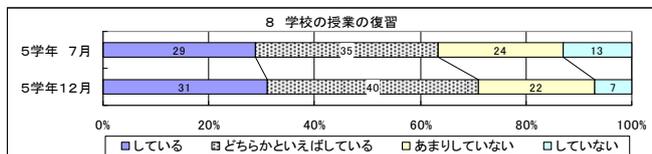
(3) 成果について

7月と12月に行ったアンケート調査の結果を下記に示す。

① 学校の授業の復習

「学校の授業の復習」については、「していない」児童が6ポイント減り全体の1割を切ったことは評価に値する（図3）。

【図3 学校の授業の復習】

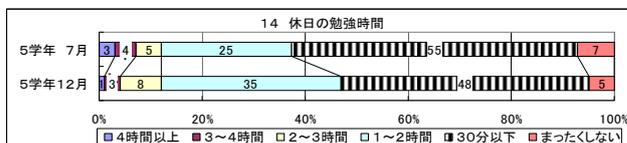


② 休日の勉強時間

「休日の勉強時間」については、「1～2時間学習」している児童が10ポイント増え、「30分以下」の児童が7ポイント減っている。家庭学習については、当初「自学プリント（教師が作成して児童に配布）」で学習方法を学ばせ、家庭学習の習慣が身に付いてきたのを確認してから「自学ノート（児童自らが課題を見つけ自主的に行う）」方法に移行した。

また、帰りの会で「自学テーマ」を与えるような指導も行ったことから、児童が取り組める課題が広がったり、継続して行ったりできるようになったと考えられる（図4）。

【図4 休日の勉強時間】

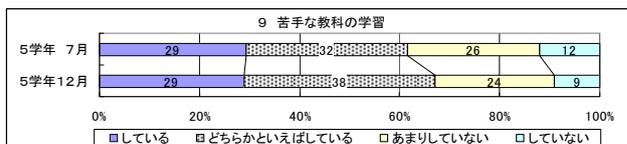


③ 学習意欲の向上

学年が上がるほど学習内容も難しくなり、苦手意識が学習意欲を損ねることが考えられる。

担任は、学習支援員や学生ボランティアによる支援を得ながら「個に応じた指導」を継続し、児童の「できた」「もっとやりたい」といった意欲の向上に努めてきた。その結果、「あまりしていない」「していない」児童が減少し、「どちらかといえばしている」児童が6ポイント増えた（図5）。

【図5 学習意欲の向上】



④ 個人差に応じた指導

基本的な学習内容の定着をはかるために2度に渡って算数教室を実施した。1回目は家庭訪問期間中、各学級2～3名（学年で10名弱程度）の児童を対象に、算数の少人数指導担当者が基礎的・基本的な習得をねらい個別指導を行った。

2回目は対象児童の枠を広げ学級担任も指導に加わり、引き続き個別指導に当たった。校内体制として一斉に行うので指導の機会が保証され、指導記録を蓄積し反省を加えながら個別指導を実施した。

(4) 来年度以降の課題について

基本的な生活習慣の定着に向けては、家庭訪問、学級懇談などで必ず話題に取り上げるなど、様々な機会を活用して家庭との連携をいっそう深めていくとともに、学年に応じた望ましい学習態度の形成に向けても粘り強く指導を重ねていく。

個人差に応じた指導・学習意欲の向上に向けては、算数教室を継続するとともに、学年ごとに児童のつまずきに応じて放課後の個別指導の機会を確保していく。さらには、普段の授業の中で個に応じた指導が確実にできるような授業の改善を行う。

小中の連携に向けては、出前授業の在り方をは

じめ中学校との話し合いをいっそう綿密に行い、よりよい橋渡しができるように相互理解を深めていく。

取組事例②

「アクションプラン2009」

仙台市立袋原中学校 仙台市立四郎丸小学校
仙台市立東四郎丸小学校

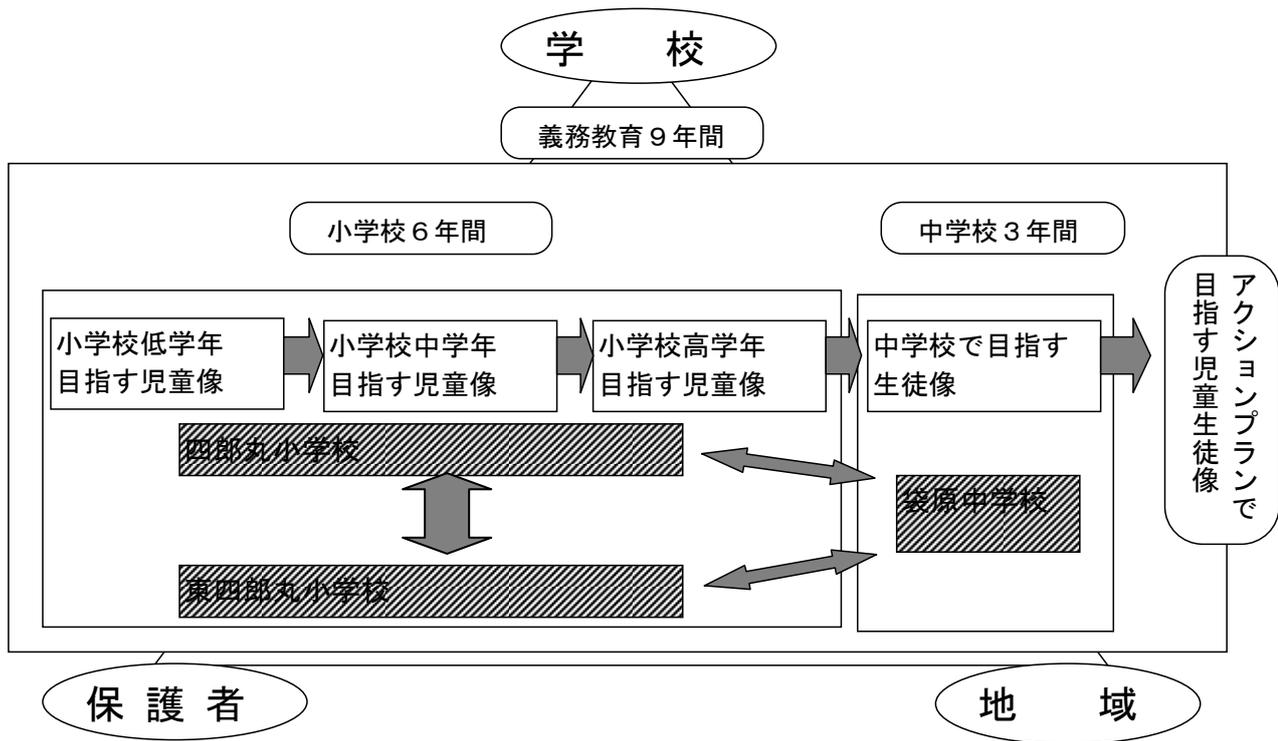
袋原地区3校による「アクションプラン2009」については、各校が下記に示す指標1～3に向けて取り組んだ様子を記載する(図6)。

【図6 各校の重点事項】

<指標1>		<指標2>		<指標3>	
基本的な生活習慣及び家庭学習の習慣化が図れたか		基礎的知識の習得による学習意欲が喚起されたか		小中・地域連携の推進は図れたか	
袋原中学校	<ul style="list-style-type: none"> ○テレビゲームやテレビの視聴を少なくするような指導支援の徹底を図る。 ○宿題等の活用、普段の家庭生活の計画を立てさせるなどにより、家庭学習の時間が増えるような指導・支援の徹底を図る。 	袋原中学校	<ul style="list-style-type: none"> ○基礎的知識としての本校独自のMP学習の指導・支援の徹底を図る。 ○各教科の授業において、基礎的知識の定着を図る ○家庭学習支援のための基礎的な内容の宿題を計画的に実施する。 	袋原中学校	<ul style="list-style-type: none"> ○小中連携について、昨年度と今年度の活動内容を比較し、より連携ができるような体制をつくる。 ○地域との連携については、授業参観等を地域に公開し、地域住民の意見等を取り入れる。
四郎丸小学校	<ul style="list-style-type: none"> ○家庭と連携をとりながら、「早寝・早起き・朝ごはん・あいさつ」の習慣化を図る ○家庭と連携をとりながら、学年相応の家庭学習(内容・時間)の習慣化を図る。 	四郎丸小学校	<ul style="list-style-type: none"> ○積極的な授業改善を図る。 ○分かる・できる授業・効果的な個に応じた指導・基礎的な内容の定着のための指導法の工夫・改善を図る。 	四郎丸小学校	<ul style="list-style-type: none"> ○教師間の積極的な連携・交流を図ることによる9年間の見通しをもった指導法の工夫を図る。 ○「自分づくり教育」と関連させながらの児童生徒間の積極的な交流を図る。 ○取組についての積極的な公開をする。
東四郎丸小学校	<ul style="list-style-type: none"> ○家庭との連携による学習基盤を支える生活習慣の習慣化を図る。 ○家庭との連携による家庭学習の習慣化を図る。 ○健康と学習の結びつきについて学ぶ機会をつくる。 	東四郎丸小学校	<ul style="list-style-type: none"> ○基礎・基本となる学習姿勢や学習内容の定着化への工夫を図る。 ○個に応じた学習指導の工夫と指導方法の改善を図る。 	東四郎丸小学校	<ul style="list-style-type: none"> ○中学校区にある小中学校間における積極的な交流を図る。 ○地域住民や施設などとの連携促進を図る。

袋原地区3校の取組の関係を下記に示す。(図7)

【図7 袋原中学校区でのアクションプランの取組についての構想図】



仙台市立袋原中学校

(1) 学校の状況について

本校は開校当初より、「生徒指導推進モデル地区」に指定されるなど、市内でも生徒指導において重要視されている学校である。4月に行われた全国学力・学習状況調査の結果から、次のような傾向が見られた。

本校の生徒は家庭での生活において、テレビ・ビデオ等の視聴やテレビゲーム、インターネットなどに多くの時間が費やされ家庭での学習が十分に確保されていない。

授業については、国語の授業が好きで、内容も理解していると考えている生徒が多いものの、全国平均に比べ平均正答率が約5%も低く、前述の家庭学習の時間が少ないことから、学力が定着していないと推測される。

全国学力・学習状況調査は、第3学年を対象としているが、同様の学習状況調査を7月に本校第2学年でも実施した。仙台市の平均は3年生が対象となるため、他学年間との比較になるが、本校第2学年の傾向としては本校第3学年と同様の傾向が見られることが分かった。

(2) 全国学力・学習状況調査等を活用した取組について

① 指標

ねらいを達成するために以下の三つの指標を設定した。

定した。

【指標1】 基本的な生活習慣及び家庭学習の習慣化が図れたか。

【指標2】 基礎的知識の習得による学習意欲が喚起されたか。

【指標3】 小中・地域連携の推進は図れたか。

指標1については、家庭学習の時間の確保のために、テレビの視聴やテレビゲームの時間を少なくするように、生徒に働きかける必要があると考えた。また、各教科における宿題の活用方法を学校全体で計画的に取り組むように配慮し、生徒の家庭生活の計画を立てさせる必要があると考えた。

指標2については、基礎的知識の向上を目指して、本校独自の取組であるMP学習(※)の指導・支援の徹底を図る。(※MP学習：本校独自に行っている算数・数学のスマールステップ学習である。週2コマ各学年単位に全生徒が武道館に集合し、各自が自分の能力にあわせた計画でシート学習を行っている)。

また、各教科の授業において、基礎的知識の定着を図るため、教師自ら授業内容に関して評価し改善することは重要であると考えた。

指標3については、できるだけ多くの機会に小中学校の連携を図り、児童生徒を9年間で育てていくことを心掛けるようにした。また、地域の方々に児童生徒を見守ってもらうためにで

きるだけ多くの情報を発信することを心掛けた。

これらの指標をもとに、本校の実態に即した具体的な取組を計画した。

②具体的な取組

ア) 指標 1 に関する取組

○ 「生活の記録」「学習の記録」の活用

これまで定期考査前の数週間に取り組んできた学習の記録を考査にかかわらず毎日記録し、学習習慣の見直しができるようにした。その際、テレビ等の視聴やテレビゲームの時間を記入する欄を設け、学習以外の時間についても見直しができるようにした。

○ 各教科での宿題の活用

今年度は、数学、英語、国語の3教科に関して定期的に宿題を出すように計画をした。宿題の内容も学習習慣の定着を目的としているので、解答も添付し自ら採点ができるようにした。

イ) 指標 2 に関する取組

○ MP 学習の強化

週 2 時間行っているが、それ以外にも家庭に持ち帰り学習を行った。

今回、家庭でのMP 学習の向上を目指し、各学年とも生徒に呼びかけをした。学級内に進んだ枚数を標示することなどで、生徒のMP 学習に取り組む意識を高める工夫をした。

○ 基礎基本の定着のための授業改善と授業評価

各教科において授業の内容を生徒がしっかりと理解できる授業を行うことも重要な取組ととらえた。このために教師自ら授業の評価をすることと、授業を受けている生徒の評価が大切であるととらえた。今年度は、年 2 回の授業評価を取り入れ、より分かる授業にするために改善を図った。特に数学科と英語科においては、教科指導エキスパート事業や確かな学力育成室のアドバイスもあり、よりよい授業の在り方について常に模索してきた。

ウ) 指標 3 に関する取組

○ 小中学校の連携

小中学校の連携については、相互の授業の様子を参観し合うなど、定期的に訪れる機会を設けた。中学校教師による出前授業も実施し、11 月に行われた理科の出前授業では、授業の様子や感想などから、中学校の学習に対する不安などが減少したと考え

られる。出前授業は、1 月に英語科、2 月に社会科を実施した。

仙台市小学校陸上記録会の練習時期に陸上部の生徒が各小学校を訪問し、小学生との練習会を行った。さらに、バスケットボール部の生徒が、四郎丸小学校の保健体育のバスケットボールの授業に参加した。

○ 地域との連携

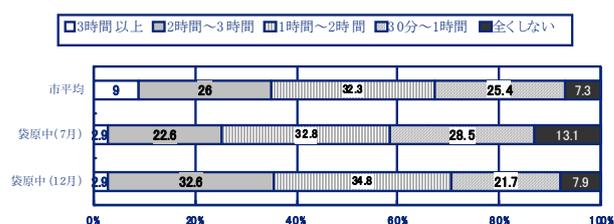
学校で行っている取組について地域の方や保護者に広報をするためにリーフレットを作成し配布した。「東中田学びのコミュニティ」を今年度立ち上げたのを利用し、職場体験学習に参加する 2 年生数名に、「読み聞かせ」の学習会を地域の読み聞かせサークルの方々に開いていただいた。

(3) 成果

7 月に行った学習状況調査を 12 月にも行い、次のような結果を得た。

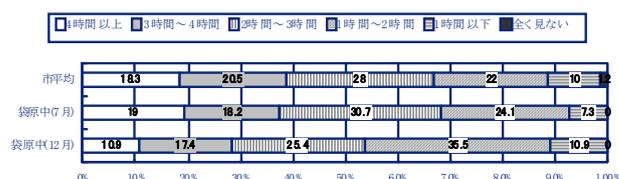
7 月に調査を実施した時よりも、家庭での学習時間が増加していることがうかがえる(図 8)。特に 2 時間以上の学習時間が、10 ポイント増加しており、家庭で学習時間を確保する生徒が増えていることが分かる。また、「全くしない」という生徒も減少し、これまで家庭学習にあまり取り組んでいなかった生徒も学習するようになってきている。

【図 8 学校以外での一日の学習時間】



テレビの視聴時間に関しては、2 時間以下の生徒が 15 ポイントも増加しており、全体的に視聴時間が減少しているのが分かる(図 9)。

【図 9 一日のテレビ視聴時間】



ところが、テレビゲームをする時間については、増加している様子が見え、テレビの視聴時間の減少が必ずしも学習時間の確保につながって

るとは言えない。

以上の生徒の変容も踏まえ、今回の取組に関する成果を指標に基づいて検証した。

まず、「指標1」に示される生徒の生活習慣の向上に関する部分では、生徒の計画表から、少しずつではあるが勉強時間が増加していることが確認できる。また、テレビの視聴やテレビゲームの時間に関しても、担任が常に状況を把握できるので、生徒の意識が変化していると考えられる。

「指標2」に示される基礎的知識の定着に関する部分では、MP学習の推進が挙げられる。また、各教科の授業においても他教科の教員も含め多くの教員が参観する機会が増えるので、教師自身の授業改善に対する意識も向上したと考えられる。

「指標3」に示される小中・地域の連携に関する部分では、特に小中の連携が強化された。これまで生徒指導面に関しては、常に連携を図りながら取り組んできた。今回、学習面に関しての本格的な小中連携の取り組みにより、各学校の実態をより適切に把握できたと考えられる。このことは、中学校における生徒理解や学習指導において重要な情報である。

（4）来年度以降の課題について

今回の取組で、家庭学習の定着と習慣化という点に関しては、ある程度の成果があったと考えられる。しかし、宿題を課すことは家庭学習の時間

を作ることを第一の目的としており、自ら進んで学習を行う点では、これからの課題である。また、宿題に関する取組の中には、開始当初、提出をしっかりとしていた生徒も回を重ねるごとに提出率が低下し、提出者と未提出者が固定されている教科も見られた。さらに、各種行事やインフルエンザの対応ために軌道に乗っていない教科も見られ、今後改善の必要がある。その反面、宿題を要求する生徒も数多く見られるようになってきており、取組を工夫することで、まだまだ意識を向上させることができるのではないかと考えられる。

仙台市立四郎丸小学校

（1）学校の状況について

「早寝・早起き・朝ごはん」等の基本的な生活習慣については、十分に身につけているとは言えない状態である。

国語や算数が大切であり将来役立つものであるという意識は高く、2年生では、意欲的に取り組める傾向にある。

過去3年間の本校の標準学力検査の結果を見ると、3年生からの正答率が下がる傾向にあるものの、6年生になって正答率が上がる傾向にある。

（2）全国学力・学習状況調査等を活用した取組について

本校の取組について、下図に示す（図10）。

【図10 四郎丸小学校のアクションプラン構造図】

【袋原中学校区学力調査活用アクションプラン指標】

- 〈指標1〉 基本的な生活習慣及び家庭学習の習慣化を図れたか。
- 〈指標2〉 基礎的知識の習得による学習意欲が喚起されたか。
- 〈指標3〉 小中・地域連携の推進を図れたか。

学力向上のための9つのアクション

〈指標1〉

- ①家庭と連携をとりながら「早寝・早起き・朝ごはん・あいさつ」の習慣化
- ②家庭と連携をとりながら、学年相応の家庭学習（内容・時間）の習慣化

〈指標2〉

- ①積極的な授業改善
 - ・分かる・できる授業
 - ・効果的な個に応じた指導
- ②基礎的な内容の定着のための工夫改善

〈指標3〉

- ①教師間の積極的な連携・交流を図ることによる9年間の見通しを持った指導
- ②自分づくり教育と関連させながらの児童生徒間の積極的な交流
- ③取組についての積極的な公開

《具体的な方策》

①学校だより等による「早寝・早起き・朝ごはん・あいさつ」の啓発 ②「家庭学習のすすめ」による学年相応の家庭学習の啓発 ③家庭学習カードを活用した計画的な家庭学習の推進	①授業研究等を通しての授業改善 ②学習支援員による指導の工夫（TT個別指導） ③放課後の個別指導（補充的・発展的内容：学習支援員・学習ボランティアによる学習支援） ④朝のｽﾀｲﾑ・読書ﾀｲﾑによる、国語や算数の基礎的内容の定着	①小中の相互授業参観、検討会参加、中学校による出前授業、各種連絡会の開催 ②部活動との交流、生徒会による説明会、学校見学 ③小中授業参観、交流活動の地域への公開 ④アクションプランの取組や進捗状況の地域への発信 ⑤「学びのコミュニティ」との連携
---	--	--

《評価》

①「早寝・早起き・朝ごはん・あいさつ」の習慣が身についたか。 【アクションプランアンケート・学校教育活動アンケート】 ①学習用具・学習準備物を忘れずに持ってくる事ができたか【観察】 ②学年相応の家庭学習の習慣が身についたか。 【アクションプランアンケート・学校教育活動アンケート・家庭学習カード】	①②授業改善、指導法の工夫、個別指導ｽﾀｲﾑ等によって基礎的内容が定着したか。 【仙台市標準学力検査・診断テスト】 基礎的な内容の定着により学習意欲が喚起されたか。 【授業の自己評価カード・学習意欲調査・アクションプランアンケート】	①③児童生徒の9年間を学校・家庭・地域が一体となって育てようという意識が高まったか。 【関係者アンケート】 ②中学校生活への期待感が高まったか。 【「自分づくり」のまとめ】
--	---	---

（3）成果について

「袋原中学校区アクションプラン」における本校の取組は、主に2学年を対象に考えてきた。本校の「学力向上のための9つのアクション」の中の、学年に応じた指導方法の工夫では、高学年は教科担任制、中学年は教科エキスパートの活用と少人数指導、そして、低学年では学習支援員、学生ボランティアを用いたTTや個別指導とし、授業改善を柱とした学力向上策を進めることとして取り組んできた。以下にアクションプランによる成果を示す。

① 指標1

生活習慣や家庭学習の習慣化について、家庭への積極的な投げかけ（学年だより、家庭学習カード等）により、テレビやゲームの時間が減少し、家庭学習に取り組む時間が増えてきている。特に「家庭学習をしない」と答えた児童が0%になったことが大きな成果と言える。1時間以上取り組む児童が全体の50%を超えるようになった。特に家庭学習に関しては、取り組んできたものを学習支援員と協力しながら、その日の内に評価等を行うことが児童の意欲的な取組につながったと考える。

「早寝・早起き・朝ごはん」では、特に「朝ごはん」に変化が見られるようになり、「食べない」

児童が0%となっている。学校と家庭との協体制のもとで取り組まれるようになってきた成果である。

② 指標2

学習支援員とのTTや個に応じた指導等の授業改善や指導法の工夫が、児童の学習への意欲的な取組や基礎的な学力の向上につながってきている。学習支援員が、児童が集中して学習に取り組めるよう声がけしたり、個別に指導したりすることがより効果的であった。放課後の「学びタイム（個別指導の時間）」においては、学生ボランティアとともに児童一人一人の課題にあった指導をすることで、確実に基礎的な力が身に付いてきた。

③ 指標3

小中連携として取り組んできた相互授業参観は、小中お互いの実態を知ることができ、小学校で、あるいは中学校で取り組まなければならない課題を見つけることに大いに役立った。部活動などの児童生徒間の交流については、単に中学校生活への見通しをもつことだけにとどまらず、期待感の高まりや、中学校でやってみたいことなどが明確になった児童も少なくない。今後も、より積極的に様々な交流を考えていきたい。

(4) 来年度以降の課題について

① 指標 1

「早寝・早起き」に関しては、十分身につけているとは言えない状態にある。家庭との連携をさらに密にしていきながら、生活習慣の確立が学習にも大きな関係があることを家庭にも啓発していくことが大切である。

宿題等については、十分な手応えを感じているので、今後は「自ら取り組む」ことを目標としながら、自分で課題を見つけて取り組むことができる児童の育成を目指していきたい。また、特定の児童は家庭学習が身につけていない傾向にある。

② 指標 2

今後も学習支援員、学生ボランティアと協力しながら、より個に応じた指導の工夫改善に努めていく。学力向上の一番の柱は授業であるので、日々の実践の充実がさらなる学力向上に結びつくと考える。アンケートでは、学習意欲については、児童が「どうなったら学習意欲が高まった状態といえるのか」という指標を明確にしていきながら取り組んでいく必要があり、今後の課題となる。

アンケートでは、特に国語科に関する意欲が落ちてきたと考える。学習支援員等の活用に関しては、主に算数で行ってきたこともあるが、学習内容が難しくなってきたという児童の感想も決して少なくはない。分かるという手応えと学習意欲は密接な関係にあるので、特に国語科の指導の工夫は大きな課題となる。

③ 指標 3

小中学校間の連携の形が見えてきた段階なので、取組を通して9年間を見通した指導をはっきりとさせ、小中学校それぞれに取り組むべき課題を明確にする必要がある。また、アクションプランとして、地域や保護者との連携をどう図っていくのかが今後の大きな課題となる。

④ 児童・生徒の交流（小学校の視点）

本年度の交流活動…「陸上記録会練習会における中学校陸上部との交流」
「送別球技大会における中学校バスケットボール部との交流」
「中学校生徒会による中学校説明会・授業参観・部活見学」

小学校児童にとって、中学校に進学すればこんな中学校生活があるのだという見通しをもつことができる。このことで、まったく知らないところからくる不安は解消され、ある程度の期待感に変わる。小学校（学級活動）における進

学指導に大きくプラスとなり、実感を伴う指導ができると考える。また、中学生の活動を目の当たりにして「あこがれ」をもつことも期待できる。「中学校であんなこともしたい、こんなこともできる」という意識は、小学校における「自分づくり教育」にも大いに役立つものである。

⑤ 出前授業

本年度の出前授業…「理科」「英語科」
「社会科」

学習のつながりという面で、高学年教科担任制の効果をさらに増加させるものとなると考える。小学校の教科担任よりさらに専門性をもった教師が授業を行うことにより、児童の教科に対しての興味・関心の高まりが期待できる。授業後の児童の感想にも「中学生になって毎回こんな授業ができたら楽しい」とあるように、学習意欲にもつながると考える。小学校の学習内容が中学校の学習内容にどのようにつながっていくのかを踏まえた授業は、小学校でも意識していかなければならず、体系化された教科内容をとらえるという点でも、参観する側にとって大いに参考になる。

⑥ 相互授業参観

本年度の相互授業参観
袋原中提供 4 時間
四郎丸小学校提供 3 時間
東四郎丸小提供 3 時間

中学校での授業の様子を参観することにより、成長した様子を確認できるということは、それだけでうれしいことである。その中で、小学校の時とは違った面を見せる生徒も少なくない。「小学校の時はあんな姿はなかった…」という思いも参観した教師から聞かれる。逆に「すごく変わった」と感心する感想もある。同じ地域の子供たちの様子を認識できることは、教職員が互いに意識できる面もあり、さらには、地域ならではの課題や特質も見つけ出すこともできる。相互に授業参観することにより、地域として、9年間をかけて子供たちを育てるという意識が高まることは大いに期待できる。

連携を図ることは、共通認識の基に地域の子供たちを9年間かけて育てることであり、その中で、「小学校でできることやしなければならぬこと」「中学校でできることやしなければならぬこと」をそれぞれに明らかにして取り組むことであるととらえる。

仙台市立東四郎丸小学校

(1) 学校の状況について

全国学力・学習状況調査結果から、国語科及び算数科において、AB 問題共に全国平均を下回っている。また、仙台市学力標準検査から見た学年別の学習定着状況をみると、学年が進むにつれてポイントが低くなるのではなく、4 学年で急に低下していることが分かる。

教師がとらえている児童の実態としては、学んだことを他の学習に生かしたり、考えを深めたりしていくのを苦手としている傾向がある。また、学んだことをそのときには理解していてもその後忘れてしまい学習の積み重ねがうまくできていない状況にある。

(2) 全国学力・学習状況調査等を活用した取組について

① 指標 1

ア) 生活リズムアンケート

保健安全指導部により、毎月1度全児童へアンケートをとり結果について職員会議の場で傾向や指導方向の検討をしている。各学年良好な結果となってきているものは、「朝ごはん、洗顔、歯磨き」の3項目であり、各学年努力事項となっているものは、「早寝、排便」の2項目である。指導のあり方としては、各学級での声掛け、意識付けと懇談会での啓発結果の分析、養護教諭による保健指導や保健便りによる家庭への啓発活動、栄養職員による食の指導等が挙げられる。

イ) 家庭学習のすすめ

研究部より家庭学習の仕方について、目安となる内容や時間、意義などについての資料を作り配布した。また、全学級で宿題を毎日出すことを決め家庭学習の習慣作りに取り組んだ。

② 指標 2

スキルタイムは、毎週金曜日の始業前10分間を活用し、漢字や計算の練習に取り組んでいる。また、月曜を5校時限として放課後14:45~15:00を「まなびタイム」として希望する児童を対象にして、本年度は年12回実施、意欲の向上と基礎内容の定着化を図り取り組んできた。

個に応じた指導・支援としては、教科担任制を5・6年生(社会、算数、理科、音楽、家庭、体育)4年生(社会、理科)で実施するとともに習熟度別指導を4年生(算数)で行っている。児童からは「教科について興味関心が増した」「分かりやすくなった」などの感想を得ている。また、学習支援員や学習サポーターが授業に入り

学習や生活面での支援に当たっている。また、学力向上サポーターからは、学校全体の授業などの実践状況から工夫改善すべき点について指導助言していただいている。

③ 指標 3

連携校相互の授業参観は、これまで5回実施している。参加した教員からは、他校の様子や卒業生の成長が分かりよかったとの感想を得ている。また、中学校による6年生への出前授業や陸上記録会前の練習会においては、児童が中学校を身近に感じるよい機会となっている。

地域との連携としては、11月19日に「拡大美化活動」を実施し50名ほどの地域の方や保護者とともに校地周りの落ち葉拾いをした。この際には、中学校より3名の生徒が職場体験学習の一環として参加していた。30日には「地域の方授業参観日」を開催し25名ほどの方が来校し実施できた。

(3) 成果について

① 意識の変化

7月に実施した時点と比較すると、明らかに向上している意識の変化がいくつかの項目で見られた。

学習関係では、「学習の準備をしている」が3.6%「どちらかといえばしている」が14.5%増加し、仙台市平均を6.1%上回る結果となった。同様に「宿題をしている」については、「していない」が0%になり、「している」も6.4%増加した。学習の必要観では国語科、算数科共に、「大切だ」と感じている児童が国語3.2%、算数3.8%増加した。また、校内研究で取り組んでいる国語科の授業理解については、「分かってきた」とする児童が増え「分からない」とする児童が減り、指導の効果を上げていると考えられる。

生活習慣関係では、就寝時刻が一定になってきている児童が6.7%増えてきた。

② 指標 1

生活リズムカードの利用によって就寝時刻や食事など、生活習慣の見直しが各家庭で行われ改善されてきた。児童の生活リズムの確立が、学習に向き合おうとする気力を高めた様子も観察された。このことは、「家庭学習の進め」といった具体的に取り組むことが児童や保護者へ示されたことによって、変わってきたものと考えられる。

③ 指標 2

児童の実態を踏まえ毎日宿題を課したり、「ま

なびタイム」「スキルタイム」を実践したりすることによって、児童自身が学習に対する必要観をもつなどの意識の改善を図ることができた。また、授業内容の理解が向上してきたことについては、児童が学習に対しての意識を向上させたことや教員間で児童に対する共通した指導を行ったことが要因と考えられる。これらのことは、児童の実態に応じた、よりきめの細かい指導方法の改善へ結びついたと考えられる。さらには、指導に当たる教職員が増え、個人差に応じた指導ができたことも大きな要因である。

④ 指標 3

出前授業、陸上記録会練習会などによる中学校との連携により、児童は中学校をより身近なものにとらえることができ、中学校進学に対する不安を減らし期待感を高めた。また、教員においては、近隣校同士の授業参観をすることにより、自分の学校の児童の実態について広い視野にたって把握することができた。他校の取組を知ることは、自分の指導方法について振り返り機会となり刺激となった。

学びのコミュニティーなどの地域との連携を進めることにより、保護者・児童共に新しい学びの場の発見につながった。また、保護者には、家庭における教育の在り方について考える機会となった。

(4) 来年度以降の課題について

① 指標 1

児童には、生活のリズムを作ることが学習成果を向上させていくことには欠かせないという点について、今後とも理解を求めよう働きかけていくことが大切である。また、指標 2との関連もあるが、保護者も「どのように学習したらよいか」といった迷い、悩みを抱えているようである。現在配布している「家庭学習のすすめ」の内容を検討し、さらに具体的な家庭での学習の在り方について示していく必要があると考える。

② 指標 2

学年会などでの担任同士の話し合いでは、児童の実態を基にした指導内容の確認や工夫の在り方など共通した話題をもつことが今後とも大切である。「まなびタイム」については、実施回数が少なくても実施方法の改善を図り、参加児童も指導にあたる教員にもさらに充足感の残るものにする。

③ 指標 3

アクションプランをきっかけにして、近隣校同士の連携を深め「地域として子供を育てる」という意識が教員の中で向上し始めている。今後もさらに連携を継続させていく必要を感じている。しかし身近な存在の地域住民との連携については、各行事などの広報にとどまり、まだ積極的な連携までにはなっていない。体験活動やクラブ活動、授業における講師など、今後も人材を探すことで地域とかわる場を模索していきたい。



【各校での出前授業の様子】

東四郎丸小学校の指標を通してのまとめ

指標 1	指標 2	指標 3
<p>①家庭との連携による学習基盤を支える生活の習慣化</p> <p>②家庭との連携による家庭学習の習慣化</p> <p>③健康と学習についての結びつきについての学び</p>	<p>①基礎・基本となる学習姿勢や学習内容の定着化への工夫</p> <p>②個に応じた学習指導の工夫と指導方法の改善</p>	<p>①中学校区にある小中学校間における積極的な交流</p> <p>②地域住民や施設などとの連携</p>

取組に対する評価

□印は一定の効果が見られたと考えられる点

■印は今後の対策が必要と考えられる点

<p>□ 「生活リズムカードは」、児童自身が自分の生活を振り返る機会を作ることができ、生活習慣の改善や定着化に効果を示した。</p> <p>□ 「家庭学習のすすめ」や担任による宿題の確認などにより、学習準備や宿題に対する取組意識に改善が見られた。</p> <p>■ 「家庭学習のすすめ」の内容について検討し、更に具体的な予習・復習の在り方について家庭へ提案する。</p> <p>■ 児童の生活に合っているも保護者の生活リズムにそわない部分があり、この点について保護者へ更なる理解を求めるとともに啓発が必要である。</p>	<p>□ 宿題の出し方、学習準備など共通した学習の取組みませ方をする事により、学習に対する意識を向上させることができた。</p> <p>□ 国語科に絞った校内研究の実践によって、指導方法が工夫され「分かるようになった」と回答する児童が増えた。</p> <p>□ 本事業による支援員や学校ボランティアなどの配置により、授業の中で理解の差が大きい児童への適切な対応がなされ、理解度の底上げができた。</p> <p>□ 「まなびタイム」や放課後の補習は、保護者から支持されている。</p> <p>■ 「まなびタイム」や放課後の補習は、より効果的な内容や方法についての検討が必要である。</p> <p>■ 「できない」と感じている学習や「分からない」と思った内容について、どう学習すればよいのか具体的な取組方法を児童に伝える必要がある。</p>	<p>□ 相互の授業参観を定期的実施したことは、他校の実情について理解したり、指導の在り方を学んだりして参考になった。</p> <p>□ 出前授業など中学校とのかかわりが深くなり、児童の中学校での学習に対する期待感が高まり、不安感が減少している。</p> <p>□ 地域に対して各種行事、教育活動への参加の呼びかけを行ったのはよかった。</p> <p>□ 「学びのコミュニティー」事業への積極的な参加ができた。</p> <p>■ 地域に対して呼びかけた各種行事、教育活動では参加者を増やせるような努力を継続する必要がある。</p>
--	--	---